

イナズマイレブン 少年サッカー伝説の威光

ぬんちやくティッシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、あるサッカー少年の物語。

世はサッカーと言うカテゴリーにおいて様々な能力を駆使し、妖術のような『必殺技』なるものを生み出し、かつ身体能力が秀でている選手が活躍する場となった。時折には『化身』なる物や、『ミキシマックス』と言う特殊な能力を外界から授与することで力の融合を可能とする物、とある。『ソウル』なるものもあるのだが、これは世に一回っていない。

そんな世の中の日本で、サッカーにおいては世界を唸らす程の実力を持った小学生が存在していた。”神が授けた伝説”とまで唱われていた。

だが、その少年が忽然と姿を消し、サッカー界から名が葬られた。その少年はサッカーから退き、月日は流れ、ごく普通の中学生として暮らしていた。

その少年の名は、真村爽―さなむら そう―

目次

第1章	闇に葬られた伝説	1
第2章	希望の狼煙、再び	6
第3章	新たな風の幕開け	12
第4章	奇想天外？突如訪れた進化	17
第5章	千里の道も壁だらけ	24
第6章	自信と自信の融合、そして反発	30
第7章	油断と自信の壁	34

第1章 闇に葬られた伝説

俺は真村爽。どこにでもいる中学生だ。そう…思いたい。

どんなに普通の生き方をして、どんなに抗ってみても、過去を拭うことはできない。それは分かっているのだけど、今は姿名前もサッカー界から抹消されたハズだ。顔も明かしてはいないから、回りが騒ぎ立てることもない。静かに暮らせるって言う事はこんなにも良いことなのか、中学1年になつてようやく分かった気がする。

なぜ、俺がサッカー界から姿を消したか…。

簡単な事さ。俺が小学生だった頃、ただただ楽しくサッカーをやっていた。ただただ友達とボールを追いかけていたかった。なのに…、俺だけ上手くなつていつて、評判が評判を呼んで、世間が俺を放さなかった。

俺は、サッカーをやっていただけなのに…。この力のせいで友達はいなくなり、普通じゃない生活ばかり強いられる。大人の汚れまで見えてきた。…もううんざりだ。サッカーでこんな目に会うなら、いつそ辞めた方がマシだ。

そして今に至る感じだ。あれ以来追っかけもいなくなったし、普通の少年として生活できている。そして、やはり自分を見出させるサッカーから離れられなくて、肩身狭い中でもボールは蹴っている。能力は維持できているハズだ。ちなみに部活には入っていない。帰宅部である。

ただ…だ。今通っている中学校…名前は聖クラウド学院なんだが、1つ問題がある。ちなみに中高一貫校ではなく、立派な中学校である。立派なのは名前だけさw

…サッカーが下手すぎる。

俺自身、サッカーに向かつて気が動かないように、敢えて弱小中学校に入学した。そこまでは良かったのだが、いざ下手すぎるプレイを見ていると、過去の威光が疼く。また…蹴りたい。そして、…これで本気でフットボールフロンティアに出場しようとしているのだから

笑えてくるし、教えてやりたくもなる…。

あ、フットボールフロンティアって言うのは全国の中学校、高校とサッカー部の最強が決められる…いわゆる選手権と言う奴だ。中学校部門と高校部門とあり、優勝できるチームは真の最強と言うこと。そして、中学校部門において、つい最近まで弱小だったのに優勝した学校がある。その名も、雷門中。某漫画の中学校の名前ままだが、筆者が原作の1つや2つは入れないと味気ないなんて言い出すから、大人の事情って…。

まあ、そんな感じで過ごしている。とても充実しているし、満足だ。なんだが、やはり気になる弱小チーム…。

だって、シユートはへなちよこだし、パスなんてまともに渡ってない。終いには技を使っているところを見たことがないんだけど…。ああああ疼くうう！

そんなある日の事だ。放課後、授業も終わったし帰ろうかと思つて、何気なくふとグラウンド近くを歩いていたら時だった。

「…ん？」

足元にサッカーボールが転がってきた。

「おーい！そこのお前！取ってくれ〜！」

コイツ…初対面に向かってお前はないだろ…。そこで過去の威光が頭を過った。まあ、お前呼ばわりされた事に対しての怒りもあるけれど、何となく、サッカーをしてみたくなった。…これが、俺のサッカー人生の再開だったとは、この時の俺は全く知らず、ボールを拾い上げて、何も言わずゴールに対峙する。ちなみにさっきのお前呼ばわりしやがった奴は、お…おい…お前…何のつもりだ…。なんて結局お前呼ばわりを突き通して動揺していたが、俺の耳には入ってなかった。この時の俺は、全意識をボールに目掛けていたからだ。

「おい！キーパー！止める覚悟がねえと、シユートつてものは止まってくれねえぜ！」

と、カツコ付けた一言を叫び、昔の感じを思い出してボールを全力でゴールに蹴り付けた！

「……」

周囲に数秒間の沈黙が訪れる。それもそのはず、俺のシュートはゴールを破壊したに留まらず、射程にはボールによって挟られた後が残っていたのだからな。

「久々に本気で蹴ったな。昔の感じは、まだ錆び付いてなくて良かったよ」

「おい！そこの中一！」

…つと、顧問の先生か。勝手なことしたから怒られるかな？

「君、サッカー経験あるのか？」

「答えは先生の後ろで惨劇のように繰り返されてますけど…」

「俺の言いたいこと、分かるな？」

「スカウトしたい…でしよう？」

「察しが良くて何より。君が良ければ良いんだが…」

…勢いで蹴ってしまったけれど、どうしよう。ただ…1つハッキリしたことがある。サッカーは、やっぱり、ボールを蹴るのは楽しい！やはり、俺はサッカーからは切っても切り離せないな…。弱小から、また始めますかねえ！

「そうですね。入る部活に迷ってましたし、ぜひお願いします。先生」と言うことで、聖クラウド学院中学校サッカー部に、一人の秀才が入部した。…が。

——翌日の放課後——

「先生。大変恐縮なんですけど、このサッカー部と俺とで勝負させてください」

と、俺は切り出した。どういいうつもりか、まあ話してやるから聞けって！

このチームに入った以上は俺はこのチームの選手だ。でも、仲間の実力も知らないのに、チーム何て言えるか、サッカーなんてチームプレイのスポーツをこなせるのか、いわば俺に向けたテストを提案したのさ。

「どういう事だ？」

「俺の実力と、このチームはかなり違いがあるみたいです。そこで、このチームの実力を知りたいわけですよ」

「…うむ。まあ良いだろう。で、勝負つてのは？」

「普通のサッカーですよ。そちらのキックオフで俺のゴールに決まればそちらの勝利。俺がそちらのゴールに決まれば俺の勝利。これでそちらも、僕の実力がよくお分かりになるでしょう」

…と提案されたワンゲーム。まあ向こうもやる気みたいで何より。新人にでかい面させてたまるかよ…精神でかかってきてるな…当然だわな。でも、それを粉々に砕いてやる。

自分が何気に上手くて、もしかしたらフットボールフロンティアに行けるかも…なんて甘い考え方を根本から覆して、愚かさを知らしめないで、慢心ゆえに成長できない。俺が、このチームを、フットボールフロンティアに連れていってやる。…もしドラみたいだな。懐かしい…。何にせよだ。このチームの連中だって磨けばダイヤになるハズだ！やっつてやるぜ！

さあ、お互い位置に着いた様だ。キックオフは向こうから。俺のゴールにはキーパーはいない。だが、勝てないワケではない。その理由がハッキリ分かるハズだ。ホイッスルで試合開始！

『ピーー！』

向こうのキックオフでトップのFW二人が攻めてくる。俺は自陣の真ん中にいる。どうやらワンツーを仕掛けようとしてるようだが、ムダだ。俺には、必殺技と言うものがあるからだ！

『真空魔 V2』

「…な!?何だ!」

「必殺技って奴か!初めて見た!」

おいおい…初めて見たって…経験無さすぎだろこのFW二人…。まあ、ボール奪えたからには攻めさせてもらうぜ!

あ、1つ言い忘れてたけど、俺ってどんな技でもどんな化身でも使えるから。チートじゃん!って言う人もいるだろう。そのチートのせいで小学生時代はまともに生活できなかったんだから良いじゃない

いかよ…。

「気にするな…！今は攻め上がるだけだ！」

とは言っても、さすがMFと残りのFWに阻まれるか。だが、これは俺の実力を示す戦いでもある。技は積極的に使おう！

『デコイ・リリース』

最近覚えた技だが、上手く行った。残るは？ゴール前のDFか。ここは敢えて、技を使わず行ってみるか？

……。とは言ってみたが、動きが荒すぎて簡単に避けれる。まったく…。DFが緻密な動きをしないでどうするよ？荒いならチャージングするなりしないと、ボールはいつまで経っても敵の膝元だぞ？最後はシュート。ちよいと本気だしてやろうか。…まあ抑えるけどな。

「おい！キーパー！怖いかも知れないぞ！無理そうなら逃げろよ！」

と言いついて、キーパーは何い!?…とキレた瞬間、俺の背からどす黒い影がゆらゆらと上がって…。

「見よ…。これが俺の化身だ！」

『魔帝 グリフォン／アームド』

「け…化身？」

「それを…身に纏った…」

「さあ味わえ！化身アームドの力を！」

『真・ゴッドノウズ』

「ひ…ひいいいいいいい！」

あらあ…ちよつとやり過ぎちゃったか…。本当はデススピアートカオスメテオで迷ったけど、ゴッドノウズで正解だね。被害がすごい…。だって、蹴った先数百メートルは挟られてるし、煙ももくもく上がって…。幸い、町の辺境にある学校だから、他の建物に影響はなかったけど、柵やら何やらぶつ飛ばしちゃった…。まあいつか。ギャグ補正が適用されるだろう。

と、なかなかシユールな感じで勝利を迎えた。この先の戦いは、一体何が待ち受けているのか…。

続く

第2章 希望の狼煙、再び

俺の実力をチームのみんなに知らしめられた所で、世界の広さと言うものを痛感しただろう。

1対チーム戦から3日が経ち、チームのやる気が随分変わってきた。どうやらビタミン剤になったようで結果オーライってやつだな。みんな良い人で快く迎え入れてくれる人も居れば…当然、年下のペーパーに舐められて頭に來ている奴も居るだろうが、そいつらもバネにして成長しているならば、俺としては何も問題ない。

「先生、いや…監督。この先輩達、実はかなり鍛練積んでるんじゃないですか？」

この聖クラウド学院中のサッカー部員はほぼ全員良い運動神経をしており、ボールを追うための瞬発力や基礎的な体力とパワー。こればかり鍛えられている。

「そうだ。トレーニングと基礎固めは怠らせてはいないつもりだ。テクニクも少しが教えているが…」

「悪く言ってしまうんですが、テクニクと言うのは見よう見まねです。ただ、それを数こなすから優劣が生まれる。決定的に足りてないのは、実践…ですかね」

今までこの監督は何をやってたんだろう…。こんなにも素晴らしいコンディションの基礎が出来てるのに、実践がないゆえ華が咲かないし、技も習得出来ない。

こうなったら、一人ずつ技やら教えないといけないな。

——翌日——

「と言うことで、今日は個人一人ずつ極意的な物を教えます。それを踏まえて、これからはその練習してみてください。それと…」

「それと…何なんだ？」

「来週の火曜日放課後に他校との練習試合があります。ちようど一週間後ですね」

練習試合があることを言うと、部員はざわめきだした。今までまと

もなことをしてきてないのにいきなり試合なんてするから仕方がないけれど、やはり気張ってやるものには目標がないとね。

「他校って？爽君、一体どこの学校と？」

「雷門中、かの有名な学校です。一昨年からですか？弱小だったのを日本やおろか世界一にまで成り上がった名門校です」

「じゃあ、あの円堂守さん達と戦うわけか…」

「うう…一気に緊張が…」

まあ無理もないだろう。今や雷門中は全国から英雄だと称され、総理大臣から直々に賞状を貰ったんだっけ？

「大丈夫ですよ。皆さんのプレイを見させてもらいましたが、努力が表れています。基本的な動きから身体運びまでスムーズな動きです。あとは持ち技があれば少しは太刀打ち出来ますよ」

「そうだ。弱音吐いてたって仕方がねえぞお前ら。おい、真村。俺らに、サッカーの極意、教えてくれ」

「…関山先輩、珍しいですね。俺に一番敵意示していたのに」

彼の名は関山 焔（せきやま ほむら）。本サッカー部のキャプテンであり、仲間以外は冷たい態度を取るが、誰よりも仲間を大切にす。でもちよつとコワモテ。聖クラウド学院中の中ではかなりの頑張り屋で、自主的にトレーニングをすることも多い。俺を気に入ってないらしく、結構ツンケンしてただけ…。あ、ポジションはMFだけど、基本的にどこでも力を発揮できる汎用型選手だね。

「勘違いするな。相手のチームに失礼がないように精一杯の努力をする。筋を通すためであって、お前を買い被っているわけではないんだ。おら、こんな御託並べてる間があるなら準備しやがれ」

「分かりましたよ、キャプテン。…筋を通す…ねえ…俺への筋はねえんだな」

「しようがないよ爽君。キャプテンは外からの大きい面は嫌いなんだ」

今話しかけてくれた優しそうな彼の名は静井 勇樹（しずい ゆうき）。

最初に俺とすぐ打ち解けてくれた同じ1年生。回りと溶け込める

のが早くて感じの良い少年って感じかな。名前の通りプレイは静かなる林の如く…きつちりと情報整理して動く頭脳派プレイヤー。また情報処理も素早いから機械のように正確な動きも出来る。フィジカル面も優秀。ポジションはDF。

「その言い草じゃ、静井君だって俺の事煙たがってんじゃない？」

「まさか、僕はキャプテンほど感情は偏ってないつもりだよ（笑）あと勇樹で良いって！」

「いやあそれは…せめて勇樹君ね？」

とまあ、他愛もない会話をしたところで、早速個人指導と入ろう。まずはキーパーからだ。

背番号1、風祭 華澄（かざまつり かすみ） GK

聖クラウド学院中サッカー部の主キーパーであり、チーム内で数少ない女子プレイヤー。女性と言って侮るべからず、沈着冷静に対応し、堅実なセービングをする。磨けばとても優秀な守護神となるだろう。

「お願いします。風祭先輩」

「先輩なんてやめてよお〜爽君のが上手なんだから、教えてもらう身からしてもね」

「いやいや、風祭先輩で勘弁してくださいよお…」

こんな感じで気難しくなく明るくて楽しい人なので、俺もなかなか好きだぜ。…恋愛面ではないからな。

実際可愛いからモテるらしいけど。…この話は止めよう。また今度だな。

「…ですすね。今回はセービングの基本はしっかり鍛えられてるので、技と行きましようか」

本当にみんな優秀な基礎固めが出来てるのに弱小なのは技がないからだ、やはり技がないと決定打に欠けて押し負かされるのがオチだからな。

…と言うか、技の練習はしなかったんだろうな。実践があればテクニクも向上して、自然と技が出るようになるだろう。ただ、俺から

すれば、まだ粗削りだ。これからサンドペーパーで磨く勢いで鍛えてやる。

「技…かあ。私に扱いきれるかしら」

「大丈夫ですって。とりあえず、簡単に強めの技を教えますね。風祭先輩、シュートお願いしますす！」

「うん、行つくよー！それえ！」

風祭先輩の細い足から放たれたシュートはなかなか威力があり、これならカウンターに使える…と思いつつ迫ってくる！

「よく見てくださいね！」

『真・ゴッドハンド』

見事にきっちりキャッチ。はなたれたゴッドハンドは力強くシュートを止め、余韻を堂々轟々と醸している。

「風祭先輩には、これを覚えてもらいます」

「それって確か、円堂守さんが一番最初に覚えたって言う伝説のゴッドハンドじゃない？」

「ええ、よくご存知で」

「かなり難しいって聞いてるわ。私に出来るかしら…」

「大丈夫ですって。俺が一緒ですから…俺と完成させましょう？」

「爽君…」

…何やってんだ俺は？

とにかく風祭先輩にはゴールキーパーである以上、簡単にシュートを決められても困る。そのため、キャッチやパンチング等、形はきちんと出来ているようなので技でカバー出来ればと思う。

もしかしてだが、これだけトレーニングと努力をしてきたのなら、技やら何やら使いこなしたらとんでもない強豪になるんじゃないだろうか？監督は何も言っていないが、現役はかなり弱いチームの出しだ。そのためまともに技は教えられないだと、他の先生が言っていた。ただ人一倍努力する人だから部員はその鏡になったんじゃないか？…と。

…まあ、今はなんにせよ控えた練習試合のために教えられることを教える。技が全てとは言わないが、やはり使えるか使えないかで白黒

がつくこのご時世だ。技がないと劣勢しかないからな。

背番号2、大地 響（だいち ひびき） DF

チームのDFの中で最もブロック率が高い。見た目は肉付きの良
い感じだが、思いがけぬフェイントに対応する瞬発力がチーム1位2
位を争うくらい高く、敵を手こずらせる要となる選手。

「よろしく。大地」

「何だよ。同級なんだから下の名前で呼んでくれたって良いんだぜ
？」

「そうか。響、よろしくな」

大地は俺の同級生で、同じクラスでちよつとは見知ってたくらい。
でもこれからは仲間だ。頑張るぜ。

大地って名前の通り…かどうかは言いづらいけど、体格が良いから
ディフェンスに於いては良いブロックをしてくれるかも知れない。
手先の器用さも視野に技の習得と行こうか。

「じゃあ、早速技に入るんだけど、その前にボールをキープする俺に
チャージしてみてくれ」

「え？まあ、良いけど…。行くぞ！はあああああ！」

来た…！まあ普通に避けるんだけど。やはり、突進力は強いし、ご
り押しでもイケる選手だな。

「なんのー！」

何っ!?地面を蹴ってリカバリーして突っ込んできただど！予想し
ていたとはいえ、あのスピードから急に蹴り返しが効くとは…DFは
こうでないとな！

「なるほど…分かった。じゃあ、技に入ろうか」

「技か…頑張るぜ！俺には出来るさ！」

良いねえ。技はモチベーションが良いほど答えてくれるからな。
期待できるぞ。

「良いか？今から技を実演するから、よく見とけよ？」

「実演って…相手は？」

「ふふふ…、こいつが相手をする」

…と指を鳴らすと俺の身体から明るい色彩の霧が発生し、その霧からは一人の少年が生成された。

「な…何だそれは！」

「デュプリだよ。発信者の能力を様々な感情のもとコピーされた化身の1つだ」

「へえ…テレビでしか見たことがなかったけど、デュプリって人間まんまなんだな…」

「まあね。ほら、よく見とけよ！今からやる技を習得してもらうからな。来い、サガン！」

俺がデュプリを呼ぶと、ドリブルで攻めてくる。当然、技を受けてもらうから何もしてこない。

『ビバ！万里の長城』

「こんな技を…？」

「こんなって失礼な…。それとも？もっと難易度の高い技と行こうか？」

「いや…文句があるワケじゃないんだ。こんなカッコいい技を…俺が？」

「ああ。お前はシュートブロックの金字塔にもなるし、守りの要にもなるだろう。期待してるぜ！」

とりあえず、これで二人終わったのか。あと9人は…省かせてもらうが、全員良い技を伝授したつもりだ。あとは…この1週間、成果があるような特訓をしてくれてる事を祈るばかりだ。

続く

第3章 新たな風の幕開け

——練習試合当日——

とうとうこの日がやって来たな。朝練でもみんな緊迫した中でボールを蹴っていた。やはり伝説の学校と試合をする機会は滅多にないことだし、可能な限りは100%の力でぶつかりたいもんな。

実を言うと、あれから1週間経って、誰一人として技の完成を見ていない。惜しいところまで来ている選手もいれば、もう少し特訓が必要な選手もいる。今回の試合では技が使えるか使えないかで大きく変わるだろう。かとはいえ、身体能力は言うことないから、テクニクで勝る可能性は二十文にあるはずだ。

……そして、授業はすべて終わり放課後、練習試合が一時間弱にまで迫った。

練習試合の会場はウチのグラウンドで行われる。わざわざ雷門中はご足労叩いて下さるらしい。感謝感激だね。

「はあ…緊張するよお…」

「大丈夫ですよ、あれだけ練習したんですから！」

互いを互いにモチベーションアップして、闘志をあげている。そんなに緊張するんだな。俺に限っては雷門中のように凄いチームやらは目が腐るほど見てきた。ただ、俺も雷門中のサッカーを見るのは初めてだから、しっかりと観察させてもらおうとしよう。

「来たぞ。イナズマキャラバンだ」

とうとう到着したみたいだ。全身鮮やかなブルーで輝くイナズママークがイカす雷門中サッカー部専用車、イナズマキャラバンから、フットボールフロンティアで伝説を作った選手が次々と降りてくる。「ここが聖クラウド学院中か。ワクワクするな！」

来た。頭にオレンジのハチマキを巻いた雷門中サッカー部キャプテン、円堂守だ。

「ようこそ来てくれた。歓迎するぞ。雷門中」

一応、ウチのキャプテンである関山先輩が円堂に挨拶へ出向いた。顔はああなのに筋はきつちり通す生真面目な人だから、まるで893なんだよな…。

「おう、よろしくな！良い試合にしようぜ！」

…お互いに自分のベンチに準備し、いつでもフィールドに出れるようになった。もう運命の時は目の前ってことだ。後戻りはできない。「良いですか？相手は知つての通りです。並大抵の体運びじゃ太刀打ちは難しい、いつも以上に本気で自分の実力を世界一に見せましよう！」

「「おー…」」

この試合を境に、さらにレベルアップしてくれることを信じて、俺も手加減混じりで頑張るぜ！

「さあ…見させてもらうぞ。真村爽、お前のサッカーへの思い…必ず潰す…」

—— 聖クラウド学院中 VS 雷門中 ——

聖クラウド学院中メンバー

1、風祭 華澄 GK 風 3年

解説は前作で…。

2、大地 響 DF 山 1年

解説は（以下略）

3、静井 勇樹 DF 林 1年

解（以下略）

4、水野 涼 DF 風 2年

水のように冷やややかで、見る者を凍てつかせるような冷たい目力を持つ不思議な雰囲気プレイヤー。その不思議さゆえにプレイも一筋縄では読めないルートで攻防を建てるため、変わり種としてチームに貢献している。

一概にDFと言うより、敵陣に上がってシユートすることもあれば、攻撃の要になる事もあるから、チームとしては万能型プレイヤーとして君臨。

俺の事は気にしてはいないようで、ただ上手い人には従う考えの様。

5、深山 楓 MF 林 2年

キーパーの風祭先輩について二人目の女性プレイヤー。スラツとして新体操の経験があるとかで、ボールを滑らかに運ぶことが出来る。

力はあまり強くなく、シユートの勢いやタツクルの攻め合い等では負けることは多いが、その場面に持っていかないようにプレイをしているようで、ワンツ一の要員となることがほぼ。

ちなみに判断力が長けていて瞬時にルートを判別し最適な手段を導くことが得意なため、ゲームメイキングを担うことも。

俺にはあまり関心を示さない態度をとっているが、他の先輩からの話では、あの強力なシユートを見て、心から尊敬するようになったと言う。真実は分からない。

6、関山 焰 MF 火 3年

解説は前（以下略）

7、柳 生斗 MF 火 3年

かつて最強無二と唱われた剣豪、柳生十兵衛をこよなく尊敬し、サツカーも武士道を忘れるべからずして忍のようなプレイをする。しゃべり方も侍のような口調で、必要以上に口を開かない寡黙な武士プレイヤーである。

ポジションはオールラウンダーとして使えて、居合切りのようにスプリンターを生かしてボールを追う。放たれるシユートは太刀筋のようで、敵を待ち伏せる姿は静かな闘志を燃やしている侍のような：

そしてシュートを遮る姿は歯向かう手裏剣を両断するかの様…。

8、五十嵐 颯太 FW 風 1年

パワーシューターが重宝される中でもテクニックで点を奪う事を大切にしているストライカー。位置的にはMF寄りからのストライカーだが、ボールキープが上手く、オフエンスに向いた身体能力を持っている。

彼の点の取り方は思いがけない方向から攻め、シュートに持ち込むかと思せかけて他にフェイントするか、キーパーが少しゴールから離れた所を突いてシュートするか…。戦略的には小賢しい手を使うプレイヤーだが、味方である以上は嬉しい限りだ。

俺には友好的で、同じクラスでも入学当初から仲が良かったので、もしかしたらエースコンビと呼ばれる日が来るかも知れない。

9、天野 雄大 FW 山 3年

寛容な性格に豪快な人柄、おつちよこちよいで呑気な感じの見た目ダメダメなプレイヤー。…だが、サッカーのフィールド立つと雰囲気急変し、力強いシュートを放つ野獣と変貌を遂げる。その力は天を操るとか操らないとか。

チーム内でもキック力はトップクラスで俺が入る前までエースストライカーだったらしい。こんな見る者を不安にさせるような面影があり、相手チームは油断することが多いらしく、そこに潰れ込んでオフエンスに入れると言うことで雰囲気も大事にしているとか。

まあ普段は気さくで話上手だから、誰とでも仲良くなれる先輩として、副キャプテンとしても、関山先輩からも一目置かれている。

10、真村爽 FW 林 1年

省略…

11、戊琉 慧乃 FW 火 2年

チーム三人目の女性プレイヤーでもう一人のエースストライカー。豪炎のように激しいシュートは技をも砕く…は言い過ぎだが、かなりの力を秘めている。…と言うよりは、ボールのどこを蹴れば芯にクリーンヒットしてシュート伝導率が極限まで上げられるかを研究に研究を重ねて産み出した力らしい。女性でも珍しいパワーシュー

ターとしてチームの活力剤にもなっている。

実を言うと、俺のあのシュートを見て一目惚れしたらしく、えらく積極的に話しかけて来るなと思って、恋ばなは地獄耳の風祭先輩に聞いてみたところ、俺の事が好きなんだと言われた。風祭先輩が言うなら本当なんだろう。：はあ。

とりあえず、ウチのチームはこれがスタメン。恐らく始終このメンバーでやると思う。そんなハードな試合をするわけではないのでな。

さあ、聖クラウド学院中入って初めての試合。久々にボールを蹴れるのか、存分に楽しませてもらおう。サッカーやろうぜ！

続く

第4章 奇想天外？突如訪れた進化

審判のホイッスルによりスタートを切った聖クラウド学院中VS雷門中の試合。キックオフはコイントスで決められ、結果ウチからのスタートとなった。

して、ボールは俺から戊琉先輩に渡り、そこから自陣に下げてキャプテンの関山先輩がドリブルで攻め上がって行く。その他、FWは全員上がって攻撃のチャンスを常に作れるように配備し、MFはキャプテンを筆頭にボールキープを負ってもらっている。

みんなしつかり練習してたから動きが少しは細かくなっているな。この前まで粗削りも良いところだったからな。技を使われたらお仕舞いだが、並大抵なら食らいつけるだろう。

「行かせないよー！」

むっ…キャプテン前に一人塞がったか！あれは確か、基山ヒロトだったか？しかし、相手がFWとあらばキャプテンも技を使わずとも食らい付くことが出来るだろう！

…ん？あの先輩の構え…技をやる気か！？

「く…やってやる！特訓の成果を今ここに見せてやるぜえ！」

『ヒートタツクル』

マジだ…とうとう、この学校で技を使うやつが出てきてくれた！

「よっしやあやっただぜえ！みんな上がれえ！」

「「おー！！」」

みんなキャプテンが技を使ったことに興奮してるな。これだったらもしかすると闘志が燃えて、芳しい結果になるんじゃないか？

キャプテンの技を境にMFも攻めてきて、鍛えたパスワークでボールは敵陣まで運ばれ、最終はFWの天野先輩まで繋がった。これはいい調子だぞ！

「焰…俺だっけ負けねえぜ。俺だっけ特訓の成果を！」

むっ…この気は…。天野先輩も構えに入っている。これは有り得るぞ！ここで技を決められれば、試合運びはかなり良い物となる！

「うおおおおお！」

「来い！雷門のゴールは簡単には破らせないぞ！」

『リフレクトバスター』

「止める！」

『真・ゴッドハンド』

「おお！本物のゴッドハンドだ！」

さあ…どうだ？天野はエースストライカーって事もあって、少し難易度は高いが威力の強いシュートを使えるようにした。同時に、キック力はそれなりにあったハズだからな。かなりの威力になっているハズだ。

「ぐう…く…なんて威力だ！…ぐわあああ！」

…な…なんと…。弱小チームが…雷門のゴールを破った…。

「よっしやあああ！やったぜえ！」

「やりましたね先輩！」

伝説から破った1点。それはこのチームにはかなり大きいものだ。仲間が寄って先輩を称えて喜びを分かち合って…良いな…。これが…これが俺がやりたかったサッカー。素直に喜び、仲間がいるサッカーってのは本当に楽しい。やはり、このサッカー部に入って良かったな。

「お前、すっげえ良いシュート持ってるな！今でも手がビリビリしてるぜ！」

おお…円堂まで敵を天晴れと称するなんて…さすがと言うかなんと言うか…だな。

「ありがとうございます。円堂さんに称えられるなんて光栄です！」

「おう！もつと成長すること期待してるぜ！次こそは止めてやる！」

聖クラウド学院中1VSO雷門中

「円堂」

「ん？どうした鬼道」

「相手の学校の事、知ってるな？」

「ああ。ほんの去年の俺らと同じ境遇だろ？」

「…（コクリ）。だが、こんな急に技が使えるようになるだろうか」

「そりや特訓を積んだに決まってるさ！」

「それは俺も分かる。だが、特訓をしただけで即使えるのは…怪しくないか？」

「偶然だな鬼道。俺も、少し勘づいていたんだ」

「豪炎寺まで…。俺はなんともないと思うんだがな…」

「とにかくだ。勝敗にこだわるつもりはないが…あの真村と言う選手、警戒しておいた方が良さだろう」

「鬼道…？」

こちらの先制点でモチベーションはかなり上がった中で試合再開。今度は向こうの攻撃だが、この調子でなら特訓の成果を発揮出来るかも知れない。

この試合…必ず勝つ！主導権が俺になろうと、この聖クラウド学院を日本一にする。俺はそれまで負けられない！

雷門中のキックオフで試合再開。ボールは現在、染岡がキープ。ドリブルで勢い任せで上がっていく。さすがと言うべきか…ウチのキャプテンとキャラが被ってるせいか、やり口が予想できる…。

そんなとやかく言ってる場合じゃない！やはり日本一のオフエンスは強い！守備陣をあつという間に抜き去ってDFに差し掛かって…！止められるか！

「行かせない！」

「止められるなら止めてみる！」

『クロシオライド』

なんて威力だ…あんなにも簡単に抜かれるとは！まずい！FW3人に風祭先輩一人は不利すぎる！急いで戻らないと！間に合うか!?

ボールは染岡から豪炎寺に移り、その脇に染岡と虎丸。もしかした

ら…あれをやる気か!?止められるわけがないぞ…つたく!

「行くぞ!」

『ビッグバン G5』

くっ…この威力は…これが世界一が誇る連携シュートだったのか?我ながら、中々の威力…対峙してなくても身体中ビリビリと衝撃が走りやがる…!

「ゴール前に固まれ!意地でもブロックするんだ!」

叫んでみんなに指示を振り撒いたわ良いけれど、技持ちがないDF軍に雷門の本気シュートが止められるか…期待はかなり薄い、俺が間に合うまでの壁としてどうか…!

「…先輩だって技を使えたんだ!…俺にだって、俺にだって出来る!うおおおおおおお!」

大地が迫り来るシュートに立ち向かってる!ムチャな気もするが、元々優秀なDFだ。もしかしたら強力なブロッカーとして花咲かも知れん!

『グランドクエイク』

…なっ?!確かに万里の長城を教えて、地面を殴る技であるが、地面を殴ったら城壁…と言うより分厚い土嵐の壁が出てきたぞ!あれは…確かイナズマジヤパンが世界決勝戦の相手、コトアール代表リトルギガントのDFが使用していた技だったはず!

それはともかく!大地のグランドクエイクのおかげで威力はかなり落ちたぞ!これなら間に合う!

「うおおおおお!間に合え!聖クラウド学院中のゴールは、この真村がいる限りは破らせないぞ!出でよ!我が化身!」

『魔戦士 ペンドラゴン零式』

「なんだと!」

「やはりあの選手…思った通りだ」

「そのシュートもろとも打ち返してやらあ!」

『ソウルブリンガー』

大地のおかげで威力が軽減されていたのもあり、化身でシュートをシュートで直接打ち返す事が出来た。自陣ゴールからだからエクス

カリバーで打ち返すのとは違って威力が萎縮するけど、どうか？

「円堂！お前と一騎討ちだ！止められるか!？」

「…絶対に、止めてみせる!」

『魔神 グレイト参式』

円堂も化身を出したか。これはどうなるか期待が持てそうだ。いくら俺のシユートでも距離が距離だから力配分はWinWinになってるはずだ。

「真村、やっぱりお前はスゴいや！なんとしても止めたくなくなったぜ!」

「フフ…世界一のセービング、見せてみる!」

『グレイト・ザ・ハンド』

「ぐ…やはりパワーが強い…!」

「甘いよ!」

なんだ!？戊琉先輩が円堂の化身に突っ込んでる!押し破るつもりか!？まったたく、このチームは何が起こるか分からないぜ。

「シユートは化身が放つモノだけじゃない!それをトクと教えてやるよ!はあああああ!」

『ファイアトルネード』

一見、威力の弱い技だが、彼女自身はシユートの伝導率を極限にまで高める方法を心得ているからどんな技でも強力になるはずだ。

「なにつ…く!つうわあああああ!」

「決まったあああああ!」

本当に…このチームは何が起こるか分からないぜ。弱小と呼ばれたこの聖クラウド学院が1週間の…まあ過酷だったかもしれないけど、技を自分のものに出来たのは素晴らしいことだ。

やはり俺の目に狂いは無かったな。磨けば十分に輝けていたんだ。原因はあの監督にあるんだが…。

「タイムだ!」

なんだ？雷門の鬼道…だったか？タイムなんかして、どうしたってんだ？まさか今のシユートは無効だと言いたいのか？

「この試合は中止だ。こちらの棄権だと捉えてもらっても構わない」

「棄権…？」

「おい鬼道！棄権つてどう言うことだ！」

「円堂、このチームには我々にも情報のない選手が一人入っている。お前の気持ちも分かるが…練習試合とは言え、あの選手が何者かが分からない今は、手の打ちようがない。続きはフットボールフロンティアだ」

「鬼道の意見は、俺も賛成だ」

「豪炎寺まで…」

「あの真村つて奴、どこかで聞き覚えがあるんだ。もしかしたら今は勝てない相手かもしれないんだ」

……………

結局、このあとの試合は雷門の棄権とあつて聖クラウド学院中が勝利と言う形となった。

…なぜ、棄権したのか？向こうは何も言わなかったが、雷門と言う生ける伝説が弱小にかき回されるとあれば名が廃る…と考えても良いだろうか。円堂自身は恐らく芳しく思っていないだろうが、伝統が築かれてしまったからには守らなければならない。

…真相は謎のままだが、もしそうだとするならば…雷門はずいぶん小さくなつてしまったな。

「ま…結局何で棄権したのか分からないから、変な考察はやめよう。考えるのはこの先の事だ。次はフットボールフロンティア、地区予選制覇だ。日本一への道は始まったばかりだ…」

「爽君、何をカッコつけて独り言言ってるの？（笑）」

「良い所なんですから突っ込まないで下さいよ風祭先輩……」

「いや…端から見ると気持ち悪いぞ……」

「キャプテンまで……！」

「クラスメイトの僕からしても、賛同するかな……」

「……ω……」

続く

第5章 千里の道も壁だらけ

雷門中の棄権により勝利を飾った聖クラウド学院だが、雷門が何かを警戒しての棄権だと言うことは俺を含めメンバー全員が感じている。

一体なぜ、あんなにも急に試合を放棄したのか…真相は…恐らく俺の存在だろう。けれど、まだ正体は把握しきれていないようだ。

何にせよ、今の勢いを止めてはならない。無事、雷門との練習試合を終えた今、フットボールフロンティアへの参加を学院は取り合ってくれたようで、地方予選のトーナメント表に我が学院の名前が彫られていた。

練習試合から2日経過し、部室にはメンバー全員を召集。フットボールフロンティアの事についてのミーティングと言ったところであつた。

「全員いるな?」

キャプテンの焰先輩が現時点での部員の安否を確認。そこはやはりキャプテンだと思う。きちんとチームを統率し、常に目をかけている。

「ひいふうみい……全員揃つたぜ」

副キャプテンの雄大先輩が皆いることを報告。良いねえ…部活つて感じだなあ。

「よし!それじゃ、皆聞いてくれ。この前の雷門中への勝利を踏まえ、フットボールフロンティアへの参加が発足された。もうトーナメント表には名前が載ってるぞ」

「とうとうここまで来たんだね…」

大地がこぼした言葉。それでこのチームにとってフットボールフロンティア参加はかなり大きい壁であつたのだろう。

今のこのチームなら、練習次第で大技を決められるようになるだろうし、現に技を使えるのが数人いれば、地方予選の1回戦…あわよ

くば2回戦と行けるかもだが、俺としたことが昨今のフットボールフロンティアの参加校の実力事情を知らない。

故に、1回戦から強敵が当たって来ることもあり得るし、対応も出来なくなる。油断は出来ないと言うことだな。

「トーナメント表を見れば分かるが、1回戦目の相手は傘見野中だ」「あれ？傘見野って隣の学校じゃないの？確かそんなに強豪では無かった気がするんだけど…」

副キャプテンが疑問をこぼした。

俺は傘見野…だったっけ？そのことはよく知らないが、その言葉からして、あまり強くないようだ。最悪なことにはならなさそうである。安心できるな。

「いや、最近監督が変わったらしく、かなり実力が上がっているらしい。何でも、律されて無かった部員らが息を揃えて監督に従うらしい」

「何ですかそれ…軍隊じゃあるまいし」

「相手は何だろうが全力でぶつかるだけだ。全員練習は気を抜くなよ。それじゃ各自練習に解散だ！」

……………。

各自に練習へ散ったのは良いが、雷門との試合とは違ってかなり激化するのがフットボールフロンティアだ。並な強さでは潰される可能性大なんだが、どうだろうか？

持ち技の面では比較的強い技を使えるから太刀打ち出来るとしても、ボール運びをカットされてしまったらそこからのリカバリーがうちのチームは苦手のようだ。いくら世界を制したオフェンスでもボールに触れさえ出来なかったとあれば、危機感は覚えよう。さて…。

DF部隊には強力なブロック力を付けてもらうのは当然だ。まあ、大地に至ってはかなり強いブロック技を習得してるからまだ安心できる。問題はもつと上のポジにいるMFがブロック力に乏しいこと。今回の課題はこれだな。

しかし、自分のチームの事ばかり気にしてはいられないな。

相手になる傘見野とは、一体どう言ったプレイをするのかを俺も知っておく必要がある。…フットボールフロンティア初戦は1週間後。俺らはその数あるトーナメントの中から初戦から数えて4試合目。日にちにしたら1週間後強くらい。それまでになら情報を仕入れて練習メニューの徹底を図れるだろう。

俺は傘見野の情報がないかと監督に言ってネットを走らせていた。動画でも文面でも、最悪の話は噂でも今は貴重な情報だ。

そんな気持ちで探していると、何やら面白い記事を見つけた。小さい事でも少年サッカーに関する情報を載せているサイトだったのだが、傘見野に関する情報が1つ。傘見野サッカー部は普段、近くの河川敷のグラウンドで練習していると言う。前までの傘見野サッカー部は不良が集まる…と言うレッテルを貼られている為、他の部がグラウンドを使わせれくないから…との理由らしい。キャプテンの言った通りだ。前までは律されていたんだ。…これは偵察に行く価値はありそうだな。

…ん？なんかもう1つ面白い記事が載ってるぞ。何々？小学生強豪サッカークラブ『稲妻KFC』と練習試合をしたって？

稲妻KFCと言えば、俺も聞いたことがある。地元の小学生を集めたサッカークラブだが、練習のレベルが高いらしく、小学生だと侮るとあつという間に点差が開く…と言う噂を聞いたことがある。あくまで噂は噂だと思ってるのだが、信憑性が高くてどうも言えないんだが…。

…続きがあるな、結果か？な…？15対0で傘見野の勝利だあ!?

……。確かに小学生相手に実力はプロに及ぶとは言いつらいとしても、こんなに点数が開くものなのか？だとすれば…傘見野の攻め方はかなり荒いか、それともボールをキープするのが上手く、かつシュートも正確なチーム…そう考えられる。まあ、KFCが案外強く

なかったりするのかもしれないが、世間評価が証明しているだけに少し驚きだ。実際にプレイを目にしたわけではないが…。

もしこの記事が本当だとすると、今も河川敷で練習しているはずだ。偵察がてら行つてくるか。

…黙って出ていってもバレないよな？

「あれ…？爽くん？どこに行くんだろう？…付いて行つちやおっと」
♪

…隣町の河川敷に到着。隣町と言っても稲妻町なのだが、長閑でどこか懐かしさも感じさせる街並み。俺は何となくここ場所が好きなんだよな。ちなみにウチの学院は聖町（ひじりちよう）と言う町だ。小さくて田舎っぽいが、俺は悪くないと思う。

確か、稲妻町には雷門中があるつてことで少し有名になったんだっけ？

本題に入ろう。

グラウンドは河川敷の橋桁麓にあり、いつも傘見野が練習しているとの情報だ。それまではそれこそKFCが使っていたり、雷門が練習していた様だが、雷門は専門のグラウンドを作ったらしい。KFCの

方は傘見野との交渉で移ったらしい。とは言うけど、実は河川敷にはグラウンドはもう1つあるから（実際はありません）そっちに移っただけなんだけどね。

…で、グラウンドがある場所に近づくほど練習している声と音がよく聞こえてくる。どうやら紅白戦しているようだ。

「お、やってるな?」

あれが傘見野…。どのようなプレイをするのか、見物じゃないか。

「さて…しっかり偵察させてもらおうか…」

「そうだね、相手を知るのは大切なことだもん」

「お、分かっているじゃないですか…って、何やってるんですか? 風祭先輩」

なんと…この人にはバレてたのか…全く、風祭先輩には敵わないな。

「いやね? 爽くんが学校を出ていくのが見えたから付いていこうってね?」

「まあ…俺は別に構いませんけど、ただの敵情視察ですから。面白いことはありませんからね?」

「分かっているって! 私もどんなシュートを打ってくるのか気になるしね」

と言うことで、少し予想外ではあったが風祭先輩も偵察に加わった。

と言うか、少し話がずれるが、風祭先輩はなぜこうも俺に良くしてくれるのだろうか? まあ元々誰にたいしても仲良く振る舞う人ではあるんだけど、なぜか俺にはこうやって付いて来たりだとか、この前なんか一人で帰ろうと思っていたら校門でわざわざ待っていてくれたと言う恋愛SLG的な事をしていたし…。…まさかな。

話を戻そうか。そうこう言っている間にシュートを仕掛けるようだ。きちんとしておかねば。

「シュート仕掛けるようですね。先輩必見ですよ」

「ゴッドハンドで止められる範疇であって欲しいんだけど…」

「行くぞ！止める気で構えろ！」

『マツハウインド改』

なんかリーゼントの様な髪型をしたキャプテンマークを付けている選手が放ったシュートなのだが、見てくれで風を意識した技と言うのが良く分かる。もとい、あの選手はかなり足腰が強いことが見てとれる。必然的にフットワークが予想できるな…厄介だ。

「止めるぜー！」

『デザートストーム』

おお…止めたぞ。今の技は…中東を相手にしてた時に似た技を見たぞ。あれは他の連中のシュートがなかなか通らないって言うんで厄介だった記憶がある。結局、その時は俺が積極的にシューターに回って点を絞り取っていたな。

…で、目の前の傘見野がそんな技を使っているところを見ると…、まあ…能力値による差はあるかもしれないが、警戒しておいた方が良さだろうな。

打破できる技は俺のシュートと雄大先輩のリフレクトバスター…それだけだ。確実に言える…これではツライ。

「見ましたか？今の的確なシュートと確実なセービング」

「どうやら、私知ってる傘見野とはワケが違うってことなのね…」

もしウチで傘見野に関しての情報が更新されていないようなら、一刻も早く伝えなくてはならない。違うことに確証を持って練習しても自分の首を絞めるような物だ。

…ん？何だ？練習が止まったぞ？そして、こちらに気付いてる…と言った雰囲気だ。面倒な事になりそうだ…。

「おいお前ら二人、聖クラウド学院のジャージだよな？」

続く

第6章 自信と自信の融合、そして反発

「おいお前ら、聖クラウド学園のジャージだよな？」

なんと…バレてしまったか？傘見野サッカー部の一人が声をかけてきた。

確かに、河川敷の土手に座り込んで敵情視察と来たもんだ。それは見つかるのも当たり前前つてか…。覚悟はしてたが、面倒だな。いや…ワンチャンあるかも？こいつら聖クラウド学園のジャージ…としか分かっていない。幸い、ウチの学園はどの部も同じジャージだ。だからサッカー部とは気づかれていないはずだ！

「ああ、だつたら何なんだ？」

「一応聞くが、俺らが何者か分かってるんだよな？」

やはり疑っていやがる…。隣の風祭先輩が変な口を滑らさないか不安だが、誤魔化せるかも知れないぞ。

…と言うか、なぜ誤魔化そうとしている？我々は弱小チームなんだ。最近注目されている学校が相手とあれば、情報収集がてら敵情視察など日常茶飯事だ。面倒に越したことはないのだが、ここはあえて、実際に我が手で確かめるって手もあるな。

「はい、と言ったらどうする？」

「そうだな…ツラ貸してもらおうか」

よし、かかったな！

「ちよつと爽くん！大丈夫なの!?!」

「大丈夫ですよ、ほんのちよつと情報収集の幅を広げるだけですから珍しく風祭先輩が不安げな表情をしている。

いつも明るく恐れ知らずっぽそうな性格をしているって言うのに、可愛いところあるじゃねえか…って違う違うそうじゃなくて、傘見野の連中はこの前までがこの前だからな。ヤンキーみたいな外見をしているとあれば、仕方がないか。まあ、向こうも監督が入るから無闇なことはいらないだろう。

声をかけられ、ツラを貸せと言われた以上は行かなくては…。と言うことで、練習真つ最中だったグラウンドへと下りてきた。やはり歓迎されていないな…敵がいるんだから当然だが…。

「君たちか。視察してたつてのは」

今度は違う人が出てきた。明らかにチームの選手ではない。となると、この人は誰なのか？聞かずとも分かる。

「申し遅れた。この傘見野のサッカー部の監督を勤めている、若木（おさなき）と言うものだ。第1回戦、よろしく頼む」

「ん？なぜ俺らをサッカー部だと思われる？」

「見れば分かる。君の脚の骨付きを、歩いている時に裾から少し見えただが、あれば常日頃から何かを蹴っている人の骨だ。それとも？君が蹴っているのはボールでは無いのか？」

この監督…よく分かっている…。確かにサッカーをしている奴の脚の骨付きと言うものは、常人とは少し違った物となっている。物を蹴る動作を繰り返すから骨がわずかに変形を繰り返す。故に、骨の出来が違うんだが、そんなの外観から分かるための情報はほとんど無い。なのにこの監督は見破った。

…だから何だつて話だが、おおかたご挨拶の代わりつてことか？面白いじゃねえか。

選手の身体情報を把握できている監督のチームは手強かったりする。実際に、世界でも選手の状態を基に戦略を立てる監督のチームと対戦したことがあるが、常にベストで攻められるから強かった記憶がある。確かあれは…ロシアのチームだったっけ。

そんなことはどうだつて良い。ご挨拶に魅せてきたとあれば、かなりの自信を持たれてるご様子。当日が楽しみだな。

「よく分かりましたね。そうです、私は聖クラウド学園サッカー部エースの、真村爽です。そしてこちらが…」

「キーパーの、風祭華澄です…」

「なんと、エースだったのか。それはそれは、どうだろう？敵情視察の

続きとして、我がチームのエースとキーパー二人と君たちで、力差を知らるって言うのは？」

…この監督、俺らのこと舐めているのか？今の言葉は、本番の試合の前に力比べをして、予め結果を予想しよう…と言う事だ。

提案はありがたいが、これは俺らにとつては失礼ではないだろうか？自信が過剰してか、前もって戦わせても大丈夫な相手だと思われているのだろう。確かに、俺らは…俺は違うけど、聖クラウド学園は弱小の名で通っていて、どこも試合しても点差を付けられるのがオチだった。先日の雷門との試合も棄権だったために、点数が上がったのは偶然とまで言われている。

まだ、相手は俺が入ったことで戦力は変わったことを知らないみたいだが、弱小相手に戦意喪失を目論むとは…。

「なあかんて…」

「やりましょう!!」

ゑ？…なんか風祭先輩に遮られたんだけど…。それもさつきまでの怯えはどこえやら…スゴい張り切って賛成したぞ。

「このままナメられてたまるものですか！ねっ?!爽くん!!」

「え？…ああ…そ…そうですねぇ…」

舐められてるって、先輩気付いてたんだ。やはり、サッカー部が好きなんだな。チームを蔑むとすぐこうなるからね、先輩は。

「せいぜい後悔しない様に…」

両チームとも、エース、キーパー位置に着き、チーム対になって向き合っている。ルールは簡単、俺が傘見野のキーパーにシュートを打ち、傘見野のエースが風祭先輩にシュートを打つ。3本勝負で点が多い方が勝利…とシンプルなもの。

あの監督…元一流選手で、引退と共にこの道に就いて華咲いたらしい。ただ現役の頃から厳格かつ自信家だったからな。少年サッカー界に於いてはベストな人材だったのかも知れない。だが、他人を見下す所は見受けられていたから、もしや…?…?と思ったら大正解だったな。まったく、その鼻をへし折ってやろうか…。

…だが、今はじつと耐えないとならない。あくまで目的は視察。ここで全力でやっても仕方があるまい。風祭先輩はともかく、情報を仕入れるために、圧勝してはならない。

さて、互いに準備は出来た。あとは仕切り役が合図するのみ。先攻は俺ら聖クラウド学園だ。

『ピーー！』（ホイッスル音)』

さあ、始まったぜ！見せてみる！傘見野の本気ってやつを!!
『バウンサーラビット』

続く

第7章 油断と自信の壁

『バウンサーラビット』

比較的強くない技を用いて、なおかつかなり力を抜いて放たれたシュート。さすが威力は常人のパワーとなるはずだ。

なぜ本気で打たないかって？これは飽くまで互いの戦力を知るための、つまり試合前の前戯と言うわけだ。ここで本気で打ったところで相手の戦意を喪失させるだけであって、技量を量れない。

まあ分かりやすく言えば、単なる様子見だ。

「はっ！そんなひ弱なシュートなんざ目を瞑ってでも止められる！」

さすが傘見野中だな。フラグ建設と煽り文句は天下一品だ、他の追従を許さない。

『パワーシールド』

何？パワーシールドなあ？

あれは確か帝国学園のこのキーパーが使っている技だ。まさに鉄壁の守りつつって帝国学園の優勝に貢献してたっけ…まあ雷門にあっけなく破られたけどさ。

そんなことより、何で帝国の技をこいつらが使ってやがんだ？パクリか？パクリなのか？つつても、技に著作権なんて無いし誰が何の技を使おうが勝手だが…。

でも、パワーシールドは結構難易度が高くて、上級者向けの技のはず…帝国とかが使うようにな。だが奴は現にああやって使ってるところを見ると、相手はとんでもなくキーパーの素質があるのか、あるいは…あの若木って監督の影響か？

何にせよ、相手がパワーシールドを使うってことが分かったってだ

けでも収穫だな。これを元にシューターを育てる。

ちなみに、シュートは止められた。当然だ。バウンサーラビットな
んぞ小学生低学年でも覚えられる技だ。

「何だ？何一つ手応えねえぜ。わざとやってんのかあ!？」

「おい、いくら気に入らないからって相手に突っかかるな。スタメン
下ろされたいのか？」

「あ、すみません監督！」

すげえ脅しだな：スタメン下ろされたいのか？って中学サッカー
部員に言うことか？ あの前木監督は生真面目で厳しいからこの傘
見野サッカー部を統率できるんだろうが、大人げない気もする。まあ
言ってることは正しいんだがな。

「じゃ、次は俺だな。1発ゴールですぐ勝負を終わらしてやる！早く
帰らねえと出前が：親父に怒られちまう！」

途中までめっちゃ威勢良かったのに段々青ざめて焦りだしてきた。
なんかアイツ面白えな：ネタ枠としてうちのチームに欲しいなw
そしたら毎日親父さんに怒られるう！って焦りようが見れんのか：
試合終わったらスカウトしてみよ♪

「(どうしたんだろう爽くん：めっちゃ楽しそうにニヤけてる…。後
でめっちゃ質問してあげよつと♪困ってる爽くん可愛いし♪)」

「なあ：聖クラウドって皆こんな上の空でニヤニヤしてるのか？」

「さあな：何にしても少し気持ち悪いな…」

「女子に至っては超可愛いのに…でも残念美人って良くね!？」

「分かる」

一旦場がざわついて、監督のお説教が入ったので十数分くらい待って再開した。ざわついた原因は残念美人の話題からの私語かららしい。風祭先輩は気付いてない様だが俺はすぐ察した。

で、今はゴールに風祭先輩。シューターは出前に行かないと生死が危ない奴と言う立ち合い。

「さっさと終わらせるぞ！そして俺らのモチベ上げていくぜえ！」

「何だって止めてあげるわ！」

「弱小は弱小らしく吹き飛ばされな！」

『デイバインアロー』

今度は世宇子中かあ？何でちよいちよい上級な技を会得してんだよ…。

『ゴツドハンド』

「きやああー！」

ゴツドハンドは物の見事に打ち砕かれ、ボールはネットに突き刺さった。まあ当然っちゃあ当然だよ。あの技でも雷門は苦しんだから。まあゴツドノウズじやないだけマシか。

「先輩！大丈夫ですか！」

「うう…、ごめん爽くん…敵取れなかったよ…」

涙目浮かべて謝る風祭先輩。あまりにも可愛いもんだから抱き締めてしまいそうだが思春期である気持ちをドつと堪えた。

「いえ、上出来ですよ先輩！それより、怪我ありませんか？」

「ううん、大丈夫だよ！お姉さんは強いんだから！」

うん知ってた。水を差すようだけど、風祭先輩って物凄く容姿良いのに…は関係ないかも知れないけど…でも丈夫で…いわゆるタフな身体の持ち主で、普通は擦り傷になるスライディングも、骨折するであろうシュートを何発も同じところに当てても傷一つつかない。そんな先輩を俺は影でターミネーターチャンと呼んでたり呼んでなかったりw

…

…

…

…

話を戻そうか

「はっ！口ほどでもねえやつらだ！ざまあねえぜ！」

「ごりやー回戦目はもらったな！」

早々と勝利を確信した相手方。まあこんなんがエースだって言うんだから笑うわな…。やはり弱小は弱小なんだって

でも今回は視察に過ぎない。当然、俺は本気を出していない。して、相手がどんな技を使ってくるのか。どういったレベルの戦いになるのかを知れたのはかなり大きい。これを糧に練習メニュー組んで臨めるな！

やつらとの試合まであと1週間！絶対、あの鼻っ柱へし折ってやる

！

そしてあの出前野郎スカウトしてやる！

…こっちが本音だったりw